

安田女子大学紀要 38, 13-20 2010.

## シンハラ語における対格標示名詞と動詞の結び付き (3)

—— かかわり動詞を中心に (後編) ——

宮 岸 哲 也

The Connection between Accusative Case Marked Nouns and Verbs in Sinhala (3):  
Focus on the Transitive Verbs Expressing Mental Relation to Objects (Part 2)

Tetsuya MIYAGISHI

はじめに

前回の論文<sup>1)</sup>に引き続き、今回も、かかわり動詞に焦点を当てて、シンハラ語の動詞と対格標示名詞<sup>2)</sup>との関係を見ていく。前回の論文では、以下に示すかかわり動詞の分類のうち、a～dについて述べたので、本論ではe～gについて述べることにする。

a 感性的な結びつき

b 知的な結びつき：①思考活動，②言語活動，③意志活動

c 認識の結びつき：①発見活動，②認知活動，③再生活動，④計算活動

d 態度の結びつき：①感情＝評価的な態度，②知的な態度，③意義付け的な態度  
④関係づけ的な態度，⑤表現的な態度

e 動作的な態度の結びつき

f 内容の結びつき：①内的経験の内容，②知的活動の内容，③動作の内容

g 論理的な関係の表現

そして、これらの分類の中に入るシンハラ語動詞が、対格標示名詞と組み合わせたり、かかわりの結びつきを作っているかどうか、文学作品を中心に用例を集め検証した。

### 1. 動作的な態度の結びつき

動作的な態度とは、対象に対し行動的な関係を持つ態度で、対象を物理的に変化させる作用はない。動作的な態度を表す動詞は、その意味によりいくつかのグループに分けられる。まず、*apeekshaawen siTinawaa* (待つ)、*apeekshaa karanawaa* (待つ)、*balaa siTinawaa* (待つ)、

1) 宮岸哲也 (2009) 「シンハラ語における対格標示名詞と動詞の結び付き (2) —かかわり動詞を中心に (前編)—」『安田女子大学紀要』第37号, pp25-33

2) シンハラ語の対格標示については、宮岸哲也 (2008) 「シンハラ語における対格標示名詞と動詞の結び付き (1) —働きかけを表す動詞を中心に—」、『安田女子大学紀要』第36号, pp46-47を参照のこと。

*balaaporottuwen siTinawaa* (待ち伏せする), *yanawaa* (訪れる), *waTa karanawaa* (取り巻く), *haerenawaa* (向く), *hamba wenawaa* (会う), *muNa gaehenawaa* (会う) など, 対象に近づく態度を表す動詞を一つのグループとして纏めることができる。この態度が向けられる対象は, 人や場所, 動作性の名詞であり, 対格標示を受けている。

- 1) *pemwatekugee pæmiNiima apeekshaa karana wilaasiniyaka* 《HE12》  
恋人の 到着を 待つ 女の子
- 2) *maa næwata ena turu tama balaa siTina bawa ææ kiiwaaya*. 《MG72》  
私が また 来る まで 自分を 待っている ことを 彼女は 言った。
- 3) *nikko gos sawasa aapasu ena wiTa* 《MW26》  
日光を 訪れ 午後に 再び 来た とき
- 4) *maTa eyaawa tawat hambawenna oona nææ*. 《MG46》  
私は 彼に また 会い たくない

次のグループは, 対象を避ける態度を表す動詞であり, *manga harinawaa/maga arinawaa* (避ける), *wæLakenawaa* (こぼむ, さえぎる), *nawatwanawaa* (やめる), *at arinawaa* (やめる) などがある。この態度が向けられる対象は, 対格標示名詞で表わされる。

- 5) *æya uwamanaawenma maa ma<sup>n</sup>ga hæra siTi bawak* 《KW94》  
彼女が 故意に 私を 避けて いる こと
- 6) *tæpæl peTTiya pihiTi paara ma<sup>n</sup>ga hæra ææta paarakin gaman keLemi*. 《KW96》  
郵便 ポストがある 道を 避けて 遠くの 道から 行った。
- 7) *ohu wæLakiim was wena kataa ædabaamin*, 《HE205》  
彼を こぼむ ため 別の 話を しながら
- 8) *norikoTa wæDa nawatwanna weewi da?* 《MG93》  
典子は 仕事を 辞めなければならない か?

次のグループは対象を相手に認識させる動作で, *penwanawaa* (みせる), *pennanawaa* (みせる), *dakwanawaa* (しめす) などがある。これらの態度を示す動詞の対象は, 具体名詞でも抽象名詞でもよく, それぞれ対格標示を受ける。

- 9) *mama taksiyaka næ<sup>n</sup>gii riyaduraaTa kaaD pata penwuyemi*. 《MG70》  
私は タクシーに 乗り込んで 運転手に 名刺を 見せた。
- 10) *maTa kisiyam hasarak penwana men ohugen ayædimi*. 《MW48》  
私に 何らかの 進路を 示す ように 彼に 頼んだ。
- 11) *ææ maTa kisima amutu kuLupagakamak nopennuwaa ya*. 《MG90》  
彼女は 私に 何も 変な 様子を 示さなかった。

*arakshaa karanawaa* (守る), *beeranawaa* (守る), *arak gannawaa* (守る), *rakinawaa* (守る), *ræka gannawaa* (守る), *anugamanaya karanawaa* (守る), *mudawaa gannawaa* (守る), *galawaa*

*gannawaa* (救う) など, 守りの態度を表す動詞も一つのグループを形成している。これらの態度が向けられる対象は, 対格標示名詞である。なお, これらの動詞と結び付く奪格標示名詞は, 何から守るのかを表している。

- 12) *æyi dewendoraa san maa aarakshaa nokaranne?* 《MW25》  
なぜ デウエンドラさんは 私を 庇わないのか。
- 13) *apaTa puLuwan da ee gollanwa beeranna?* 《HE81》  
私に できる か その 人達を 守ることが
- 14) *peeraadeNi wisşwawidyaalaya, pantiyak arak gena inna tenak kiyana eka* 《HE46》  
ペーラーデニヤ大学が 階級制を 守って いる 場所 ということ
- 15) *owungeema aaweeNika urumayan ruuka ganimin* 《懸10》  
彼ら自身の 遺産を 守りながら,
- 16) *ædeesşæapaalana æ<sup>n</sup>gili gæsiimwalin usas adhyaapanaya mudawaa gæniimaTa* 《HE15》  
政治の 圧力から 高等教育を 守るため
- 17) *maa mee akaratabben galawaa gniiTiyi maam situwemi.* 《MW21》  
私を この ジレンマから 解放してくれると 私は 思った。

*parikshaa karanawaa* (調べる), *piriksanawaa* (調べる), *niriikshaNaya karanawaa* (観察する), *hoyanawaa/soyanawaa* (探す), *wisşleeshanaya karanawaa* (観察する), *wigraha karanawaa* (分析する), *prayeeshaNaya karanawaa* (研究する) など調査を表す動詞, 更には, *praguNa karanawaa* (学ぶ), *igena gannawaa* (勉強する), *puhuNu karanawaa* (習う), *hadaaranawaa* (習う) など, 学習を表す動詞も動作的な態度の一グループを形成している。これらの態度が向けられる対象も対格標示名詞で表す。

- 18) *iira<sup>n</sup>ga daa, apee niwasa parikshaa kiriima sa<sup>n</sup>dahaa* 《HE216》  
翌日, 私たちの 家を 調べる ため
- 19) *anyayan pirisagee pratikriya piriksamin siTina bawa* 《WD221》  
他の グループの 反応を 観察して いる こと
- 20) *aacaaryawarayaa hæma deyak ma tarkayen wigraha koTa* 《HE121》  
博士は どの ことも 論理的に 分析し
- 21) *ara ingirisi igena ganna ena gæænu Lamayi* 《MG34》  
あの 英語を 習いに くる 女の子
- 22) *kuDaa niLiya hataLis hæwiridi striyagen shamisen waadanaya hadaaramin* 《KW24》  
踊子は 四十才の 女から 三味線を 習って

*a<sup>n</sup>dinawaa* (描く), *prakaasşaa karanawaa* (表す), *niruupaNaya karanawaa* (表現する), *situwam karanawaa* (描く), *piLibi<sup>m</sup>bu karanawaa* (写す), *anukaraNaya karanawaa* (まねる) など表現活動を表す動詞も, 動作的な態度を表す動詞の一つのグループを形成する。これらの態度の対象としてとる対格標示名詞は具体名詞でも抽象名詞でもよい。

- 23) *citra sşilpiyaa tamaagee muhuNu saTahana a<sup>n</sup>dinawaaTa* 《MW93》  
画家が 自分の 顔の 特徴を 描くことに
- 24) *magee satuTa kesee prakaasşa karam dæyi nodanimi.* 《AS203》  
私の 喜びを どのように 表すか 分からない。
- 25) *maTa wuwat muhudee darsşanaya swaabhaawika wa situwam kaLa hæki* 《AS196》  
僕にも 海の 景色を 豊かに 描くことが できる
- 26) *naaTyæ koTas anukaraNaya koTa dakwana bawa* 《KW21》  
芝居の 一部を 真似して 見せる こと

但し, *situwama* (絵画) のような表現活動の生産物を表す名詞がくると, その対格標示名詞は, 態度の向けられる対象ではなく, 生産という働きかけを受けた対象を表す。よって27) の動詞と名詞の組み合わせは, 動作的態度ではなく, 生産の結びつきである。

- 27) *maTa situwamak æ<sup>n</sup>diimaTa hoo weana kisiwak kiriimaTa* 《MG125》  
私は 絵を 描くことも 別の 何かを することも

*suratal karanawaa* (可愛がる), *sanasanawaa* (いたわる), *bhaawita karanawaa* (使う), *wiyadam karanawaa* (使う), *paawicci karanawaa* (使う), *hasuruwanawaa* (操る), *waanaya karanawaa* (演奏する), *padawanawaa* (運転する) などの動詞は, 対象に対する働きかけも認められるが, 対象の状態変化はないので, 動作的な態度の結びつきとして分類できる。

- 28) *mawat wæDimahal sohoyuriyanut maa suratal kiriima nisaa* 《KW59》  
母や 年上の 姉妹達も 私を 可愛がった ために
- 29) *patal kuriikaarayoo pas haya denek æya sanasamin unha.* 《KW42》  
鉱夫が 5. 6人 彼女を いたわっていた。
- 30) *pol kiri wenuwaTa eLakiri paawicci kelemi.* 《MG31》  
ココナツ・ミルクの 代わりに 牛乳を 使った。
- 31) *mkapitanwarun swakiiya yaatraa hasuruwana hæTi* 《PD1》  
船長たちが 自分の 船を 操る 様子

*ishTa karanawaa* (遂行する), *iTu karanawaa* (実行する) など, 実行を表す動詞は, 「約束」「意図」のような客観化された意識を示す名詞と組み合わせり, 社会意識に対する動作的な態度を表現する<sup>3)</sup>。

- 32) *oba maTa kaLa poronduwa ishTa kaLaa wage* 《MW73》  
あなたが 私にした 約束を 実行した ように
- 33) *magee yutukama mama nopiriheLaa iTu keLemi.* 《MW92》  
私の 義務を 私は 落ち度なく 実行した。

3) 奥田靖雄 (1983) 「格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房, p269

## 2. 内容の結びつき

内容の結びつきとは、心理的な活動や動作を抽象的に示している動詞が、その動詞の質を示す名詞と組み合わせさせたものである。下位のカテゴリーとして、①内的経験の内容、②知的活動の内容、③動作の内容がある。

## 2.1 内的経験の内容

*dænenawaa* (感じる), *wi<sup>n</sup>dinawaa* (感じる), *sitanawaa* (感じる) など感覚を表す動詞は、感情や感覚を表す対格標示の名詞と組み合わせたり、内的経験の内容の結びつきを作る。

- 34) *maTa duka men lajjaawa da dænuNi*. 《MW6》  
私は 悲しむように 屈辱感を 覚えた。
- 35) *taattaa mahat ruwiyakin kanu balaagena mama apamaNa satuTak wi<sup>n</sup>dimi*. 《MW7》  
父が 旺盛に 食べるのを見て 私は 無量の 幸せを感じる。
- 36) *maTa magee janamaya gæna næwata da lajjaa sitiNa* 《WD244-5》  
私は 私の 民族 について 再び 恥ずかしさをおぼえた。

## 2.2 知的活動の内容

*sitanawaa* (考える), *ha<sup>n</sup>dunanawaa* (考える), *tiiraNaya karanawaa* (決める), *kiyanawaa* (言う), *doDanawaa* (言う), *pæhædili karanawaa* (説明する), *prakaasṣa karanawaa* (述べる), *kataa karanawaa* (話す), *japa karanawaa* (唱える), *dakwanawaa* (言う), *wistara karanawaa* (話す), *teerum gannawaa* (理解する), *ismatu karanawaa* (まとめる) などの思考・言語活動を表す動詞が、思考・言語活動の内容の質を特徴づける名詞と組み合わせると、知的活動の内容の結びつきを作る。このような名詞としては、*sælæsma* (方法), *kramaya* (方法), *wisa<sup>n</sup>duma* (解決策), *ænumpadaya* (厭味), *boruwa* (嘘), *heetuwa* (理由), *kaaraNaya* (理由), *wstaraya* (理由), *mataya* (考え), *nama* (名前), *wihiLu tahaLu* (冗談) *sinhala* (シンハラ語), *mantraya* (お経) などがある。

- 37) *iiTa wisa<sup>n</sup>dum ṣṣrii laankikayan wisinma ha<sup>n</sup>dunaa gæniimaTa awasthaawa* <懸viii>  
その 解決策を スリランカ人 によって 考えるための 機会
- 38) *ee dawaswalin oonææma ekak tiiraNaya kara gena maTa kiyanna*. 《MW120》  
それらの 日から 好きな 1日を 決め 私に 言いなさない
- 39) *ciyeko ohuTa nitara ænumpada kiiwaa misa* 《MW54》  
知恵子は 彼に いつも 厭味を 言う だけで、
- 40) *ma<sup>n</sup>dak næwatii magee nama kiyaa*, 《KO127》  
少し 止まって 私の 名前を 呼び
- 41) *gihilla kaaraNaawa pæhædili karala kiwwama* 《HE229》  
行って 理由を 説明して 言ったら
- 42) *swaadhiina matayak prakaasṣa karanTa* 《HE26》  
自分の 考えを 主張する 述べるために

- 43) *sinhala kataa karana, sinhala kææma biima kana bona* 《WD194》  
 シンハラ語を話し シンハラ人の 飲食物を 飲食し

知的活動の内容の結びつきは、思考・言語活動を表す動詞が作る結びつきという点で、前回の論文<sup>4)</sup>で取り上げた「2. 知的な結びつき」とも重なる。しかし、37)～43)の知的活動の内容の結びつきでは、対格標示名詞が知的活動の結果産出されたものであるのに対し、44)～51)の知的な結びつきでは、対格標示名詞が思考・言語活動が扱う対象になっている点で異なる。

- 44) *wenat deewal kalpanaa kiriimaTa taram* 《KO91》  
 外の 事を 考える だけ
- 45) *magee hængiim dæna gat wiTa* 《MW68》  
 私の 心境を 知る 時
- 46) *tikin tika æya maa awaboodha kara gattat* 《KO194》  
 少しずつ 彼女が 私を 理解しても
- 47) *susilaaTa eewaayee barapataLakama no teerenTa puLuwana.* 《HE181》  
 スシラに この 重大さを 理解することはできない。
- 48) *owun maTa ætta kiiwee.* 《HE215》  
 彼らは 私に 真相を 語った。
- 49) *ohu kumana deyak kataa karamin siTiyaa dæyi* 《KO132》  
 彼が どんな ことを 話しているのか
- 50) *piyaa ohugen akkaa gæna noyekut toraturu æsuweeya.* 《KO92》  
 父は 彼から 姉について 様々な 情報を 尋ねた。
- 51) *nangii wilaapa demin kiyuu dee obatumaaTa liyaa* 《HE217》  
 妹が 泣きながら 言った ことを あなたに 書き

### 2.3 動作の内容

動作内容の結びつきは、具体的な動作・状態の内容を持たない動詞が、それらの内容を意味として持つ対格標示の名詞と組み合わせにより作られる。このような組み合わせを作る動詞としては、*ishTa karanawaa* (遂げる), *atapasu karanawaa* (怠ける), *ikman karanawaa* (急ぐ), *karanawaa* (する), *yedenawaa* (行う), *hamaara karanawaa* (終える), *nawatwanawaa* (やめる), *at harinawaa* / *at arinawaa* (やめる), *ata arinawaa* (やめる), *at hiTawanawaa* (中止する), *natara karanawaa* (やめる), *awasan karanawaa* (済ます), *nima karanawaa* (終える), *aaramha karanawaa* (始める), *paTan gannawaa* (始める), *karagen yanawaa* (続ける) などがある。

- 52) *kisi kaaleka pantiye wæDa atapasu karanne nææ.* 《HE186》  
 どんな 時も 授業の 勉強を さぼることは ない。
- 53) *wiwaahaya ikman karannTa* 《WD173》  
 結婚を 急ぐために

4) 宮岸哲也 (2009) 前掲書, pp27-8

- 54) *raTak paalanaya karana rajayan* 《懸7》  
 国の 政治を 行なう 政府
- 55) *magee wæDa kaTayutu hamaara kiriimaTa* 《MG95》  
 私の 職務を 済ませるために
- 56) *waadaka kaNDaayama waadanaya aaramha karayi.* 《SJ38》  
 演奏者たちが 演奏を はじめる。
- 57) *apee wæDa kaTayutu api karagena yanna oona.* 《HE95》  
 私達の 職務を 私達は 続けて いきたい。

また、具体的な動作内容を表す動詞であっても、*gayanawaa* (歌う)、*gaayanaa karanawaa* (歌う)、*naTanawaa* (踊る) などの動詞は、動作内容を表す名詞と組み合わせたり、動作内容の結びつきを作ることができる。

- 58) *giyak gasana wiTa* 《MW93》  
 歌を 歌う 時
- 59) *ciik Daans næTumak naTana yuwaLa* 《SJ37》  
 チークダンスを 踊る 一組

### 3. 論理的な関係の表現

論理的な関係とは、ある事象が、何かを表していることを示す関係であり、この論理的な関係で使われる動詞として、*adahas kerenawaa* (意味する)、*anaawaraNaye wenawaa* (示す)、*heLi wenawaa* (示す) などがある。表される事象は、奪格名詞や副詞節 *heetu koTa gena* (～により) 等で表され、何を表しているかが、対格標示名詞によって表される。

- 60) *meyin adahas krenuyee abhiyooga yanu jayagatayutu deyak bawa ya* 《懸》  
 これで 意味されるのは 挑戦 という 勝ち取るべきことがある ことだ。
- 61) *ohu niha<sup>n</sup>Da wa hun aakaaraya heetu kota gena ohu siya matayehi*  
 彼が 黙って いる 態度 により、 彼が 自分の 考えに  
*elbagat bawak anawaraNaya wee.* 《SJ72》  
 固執している 事を 示している。
- 62) *ohu tama hisa mata toppiya damaa gena siTi aakaarayan ohugee sşariira*  
 彼が 自分の 頭の上に 帽子を 載せて いる 様子から 彼の 体が  
*gata wuu ælkohol pramaaNaya heLi wee.* 《SJ37》  
 摂った アルコールの 含有量を 示している。

5) 宮岸哲也 (2009) 前掲書, pp25-33

## お わ り に

拙論では、前回の論文<sup>5)</sup>に続き、日本語のかかわり動詞の分類に依拠しながら、シンハラ語のかかわり動詞を分類し、例文を集めて各々の動詞が対格標示名詞を対象として取るかどうか検証した。その結果、今回の論文においても、シンハラ語のかかわり動詞が概ね対格標示名詞を取っていることが分かった。一方で、そのような分類法によってグループ分けしたシンハラ語動詞の中には、それに対応する日本語動詞と異なる格標示を受けている場合もある。例えば、4) の *hamba wenawaa* (会う) は、対格標示名詞を対象としてとるが、日本語では与格標示の「に」を対象としてとる。このように、各々のグループに位置づけられる動詞が、日本語とシンハラ語の間では異なり得るわけであり、この点を更に細かく見ていく必要があると思う。

とはいえ。シンハラ語において、どのような動詞のグループが対格標示を受けた名詞と組み合わせるのかを示しておくことは、言語の研究・教育において基礎的なデータを提供する上で意義がある。ただ、シンハラ語の動詞と対格標示名詞の組み合わせは、今回扱ったかかわりの結びつきや、前回の論文で扱った働きかけの結びつきに限定されるわけではない。日本語では「廊下を歩く」のように、動作の対象とはならない対格標示名詞があるが、シンハラ語の対格標示名詞にも同様の例がある。このような例を含め、今回扱えなかったシンハラ語の動詞と対格標示名詞の組み合わせについても、取り上げなければならないが、紙幅の都合上、稿を改めて論じたい。

## 用 例 出 典

- 《AS》 Aariya Raajakaruna (ed.) *asaliyaa mal.* (Colombo: Gunasena. 2000)  
 《HE》 Ediriwira Saracchandra, *heTa ecchara kaLuwara naae* (Colombo: pradiipa prakaaṣakayoo, 1975)  
 《KO》 Tadashi Noguchi, *kokoro* (Colombo: S. Godage, 1979)  
 《KW》 Aariya Rajakaruna, *kawabata yasunarigee keTi kathaa* (Colombo: Gunasena, 1998)  
 《MG》 Ediriwiira Saracchandra, *maLagiya aattoo* (Colombo: S. Godage, 1959)  
 《MW》 Ediriwiira Saracchandra, *maLawungee awurudu daa* (Colombo: S. Godage, 1965)  
 《PD》 Ranjit Dharmakirti, *pradiipaagaaraya yaTa* (Colombo: S. Godage, 1984)  
 《SJ》 Aariya Rajakaruna, *ṣreeshTha japan chitrapaTa kathaa* (Colombo: Lake House, 1986)  
 《WD》 Anula Wijayaratna Menikee, *waDabaa ginna* (kottawa: Sara Publishers, 1991)  
 《懸》 日下淑子・日下大器編『懸賞論文 (スリランカ国)迎える世紀でスリランカ社会が乗り越えないといけない挑戦』くさか基金, 2000

[2009. 9. 28 受理]